研究概要報告書【音楽振興部門】

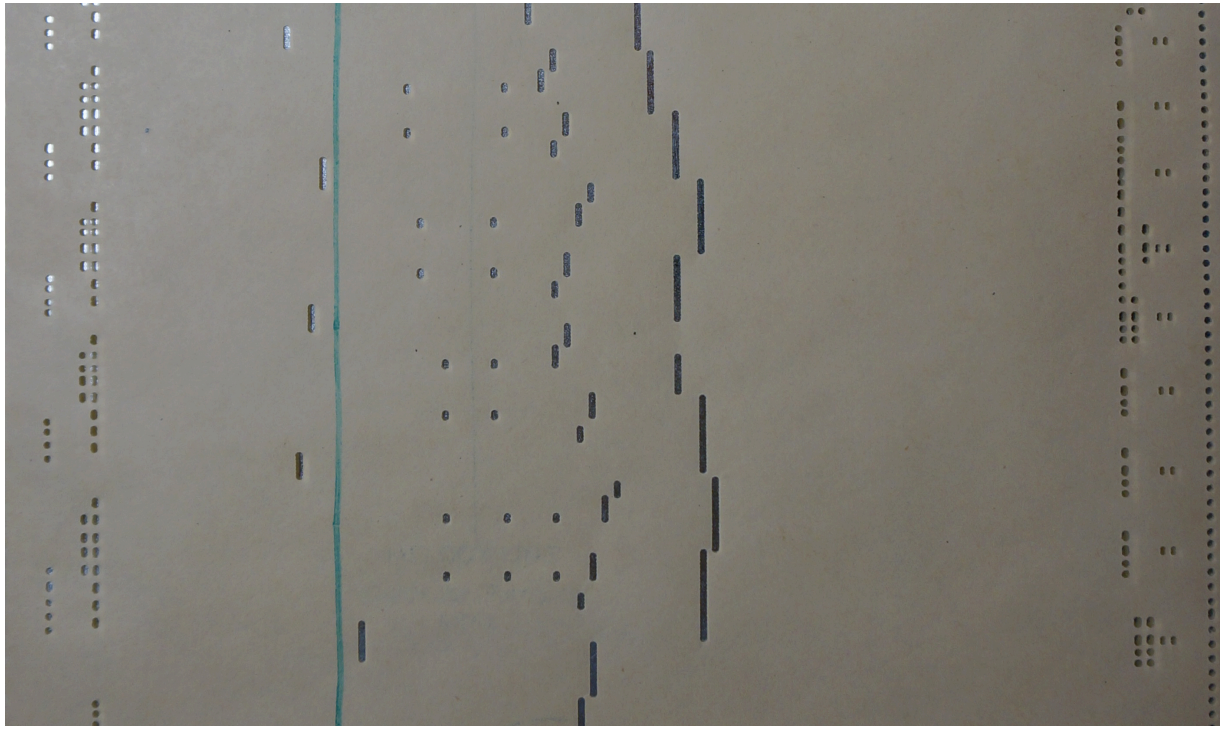
研究題目	ピアノロールの計量的解析によるルバート奏法分析	報告書作成者	鷲野彰子
研究従事者	鷲野彰子		
研究目的	これまで連綿と受け継がれてきたクラシック音楽の伝統は、20 世紀後半に入り、より楽譜に忠実に演奏しようという潮流に取って代わられた。それゆえルバートの演奏方法のような、楽譜に書かれない伝統については現代には引き継がれず、ほとんど失われてしまったとさえいえる。録音資料、なかでも聴覚と視覚双方で把握可能なピアノロールの資料を分析することで、かつてのピアニストがどのような箇所でどのようにルバートを用いていたのかを明らかにすることが本研究の目的である。		

研究内容	本研究では、ピアノロールに残された9名の演奏家によるショパン《ワルツ Op.42》の演奏記録を用い、それらの演奏を比較することで、また楽譜の記譜とそれらの演奏を比較することで、20 世紀初期の演奏の実際がどのようなものであったかを、特にルバートに着目して分析した。その際、ピアノロールの特性から、演奏のタイミングや速度の点から分析することとした。 研究方法は次の手順で行った。 1) ピアノロールをスキャンし、スキャンデータを作成する。 2) ピアノロールの再生録音資料や、(存在する場合には)同一演奏者によるこの作品の他の録音資料から、演奏の傾向や特徴で注目すべき箇所を選択する。 3) それらの箇所について、スキャンしたデータから、演奏の速度や演奏のタイミングのズレ等を計測する。 4) 演奏者間の差異、そして楽譜の記譜との差異を分析する。
研究のポイント	ピアノロールという特殊な資料を、どのように他の録音資料と同様の「録音」資料として用いることができるかについて、留意・検討した。ピアノロールは、再生されて初めて音となるが、演奏速度も楽器付属の調節つまみにより調整可能である他、楽器の状態によって、同じピアノロールを再生した場合にも演奏の状態も変化する。また、ダイナミクスを始め、演奏がピアノロールに記録される際に、大きく編集されていることにも注意が必要となる。そのため、本研究では、ピアノロールのデータ(長さ)とその再生演奏(秒)の比較や、異なる再生楽器を用いた場合の差異、ピアノロールの再生演奏と同一演奏者による同一曲の録音資料との比較等、資料間の比較を行うことで、ピアノロールの特性を明らかにし、他の録音資料と比較対照させながら研究を行えるよう工夫した。

研究結果	・ ショパン《ワルツ Op.42》を記録した 9 名の演奏家のうち、最も早い時期に生まれたシャルベンカ（Xaver Scharwenka, 1850-1924）と最も遅く生まれたベイコン（Katherine Bacon, 1896-1982）の間には、出生年にほぼ半世紀もの差がある。シャルベンカ、パデレフスキ（Ignacy Jan Paderewski, 1860-1941）、ローゼンタール（Moriz Rosenthal, 1862-1946）と比較し、それ以降に生まれたゴドフスキ（Leopold Godowsky, 1870-1938）、バウアー（Harold Bauer, 1873-1951）、ホフマン（Josef Hofmann, 1876-1957）、コットロウ（Augusta Cottlow, 1878-1954）、ヴォラヴィ（Marguerite Volavy, 1886-1951）、ベイコンの 6 名は、多くの箇所で 4 小節あるいは 8 小節単位の、息の長いフレージングで演奏をしている。 ・ 同一演奏者の行う演奏間の速度変化の差異は驚くほど小さく、その傾向は顕著なルバートが用いられる箇所についても当てはまる。 ・ 演奏中に和音を分散させる方法を多くの箇所で用いていたのは、シャルベンカ、パデレフスキ、ローゼンタール、バウアーであった。 ・ 「ターン（～）」のような装飾音の演奏方法は、演奏者によって異なるが、長く引き伸ばされた音の後の、ターンの冒頭音が拍よりも少し後に演奏される演奏方法は、9 名の演奏者ほとんどの場合で確認されたことから、この時代にはまだこうした演奏方法が残っていたことが確認できた。
今後の課題	本研究で取り扱えたのは、ごく僅かの部分に過ぎず、19 世紀のルバートの実態を明らかにするには、今後、より多くの例を検討する必要がある。ただし、本研究により、その分析の手段・方法は整ったといえ、今後の研究を行う上での基礎は確立できたといえる。

説 明 書【音楽振興部門】

自動演奏ピアノにセットされたピアノロール(左)とパンチ穴で記録されたピアノロール上の情報(右)



(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)

様式－10